

令和 6 年度 千葉県標準学力検査について

1 実施時期及び実施校

令和 7 年 1 ～ 3 月

四街道市内全小学校 12 校

四街道市内全中学校 5 校

2 評価の方法

(1) 標準化された学力検査

千葉県標準学力検査は、「絶対評価法の手続きによるテスト」である。児童生徒一人一人が、“その学年で、その教科で、達成を期待されている目標”に対して、“どの程度到達しているか”を個人別に、そして学級・学年単位で、学習指導要領に示されている内容（領域）別と観点別に知ることができる標準検査である。

千葉県標準学力検査は、「標準化の過程」を踏まえて作成してある。そのために、評価規準、問題内容、実施時期や採点方法を細かく検討し、検査結果（得点）などを解釈するための尺度を作成している。したがって、標準化された学力検査問題という性格から、問題の妥当性や信頼性については十分検討されたものとなっている。

(2) 標準化の過程

千葉県標準学力検査は、次のような標準化の過程を取り入れている。

② 学習指導要領（解説を含む）並びに県内の採択教科書を検討する。

② 学年別、教科別に、評価規準表を作成する。

③ 評価規準表から評価項目を抽出し、検査問題を作成する。

④ 問題の作成にあたっては、基本的に下記のような評価基準を目安とする。

約 80 % 以上……………十分満足…………… A

約 79 ～ 60 %……………おおむね満足…………… B

約 59 % 以下……………努力を要する…………… C

⑤ 作成した問題の予備調査を実施する。

⑥ 予備調査をしたデータに沿って問題を検討し直す。

⑦ 「折半法」によって問題の信頼性を確認する。

⑧ 修正した問題について再調査を実施し、妥当性・信頼性を確認する。

(3) 本市の評価方法

千葉県標準学力検査は、絶対評価に基づいた標準検査であり、解釈するための尺度が、上記のように示されていることから、県平均との相対比は加味せず、正答率のみをもって判断する。

80 %（点）以上

A 判定：得意である、身に付いている、高い傾向にある

60 %（点）以上

～ 80 %（点）未満

B 判定：概ね身に付いている、概ね理解している

60 %（点）未満

C 判定：課題がある、低い傾向にある

【小学校】

		国語	社会	算数	理科	外国語
1年生	市平均	B		B		
	県平均	B		B		

2年生	市平均	B		B		
	県平均	B		B		

3年生	市平均	B	A	B	A	
	県平均	B	B	B	B	

4年生	市平均	B	B	B	A	
	県平均	B	B	B	B	

5年生	市平均	B	A	B	B	A
	県平均	B	B	C	B	B

6年生	市平均	B	B	B	B	A
	県平均	B	B	B	B	A

全学年	市平均	B	B	B	B	A
	県平均	B	B	B	B	A

【中学校】

		国語	社会	数学	理科	英語
1年生	市平均	B	<u>C</u>	<u>C</u>	B	B
	県平均	B	C	C	B	B

2年生	市平均	B	<u>C</u>	<u>C</u>	<u>C</u>	<u>C</u>
	県平均	B	C	C	C	B

3年生	市平均	B	B	<u>C</u>	B	B
	県平均	B	B	B	B	B

全学年	市平均	B	B	<u>C</u>	B	B
	県平均	B	B	C	B	B

※ 太字太枠：A / 標準字体：B / 斜体字下線：C

小学校では、算数において、多くの学年で思考力・判断力・表現力に課題がある。理科においては、多くの学年で知識・技能が高く、学習内容がよく身に付いている。外国語においても、知識・技能及び思考力・判断力・表現力が高く、学習内容がよく身に付いている。

中学校では、国語において、特に相手に伝わるように話したり、相手の話を正しく聞きとったりする力が身に付いている。社会・数学・外国語では、多くの学年で思考力・判断力・表現力に課題がある。数学では1・2学年ともに、数と式、図形等多くの領域で課題がある。

授業改善のポイント

■小学校 国語科

○指導改善のポイント

「言語」の領域について

- ・低学年では身近な事物や出来事を表す語句の習得を通して語彙を豊かにし、高学年では、思考や感情に関わる語句を増やして語感や文脈に応じた使い方を意識することが大切である。そのために、漢字や語句の学習などの基礎的・基本的な学習内容について、反復学習や確認テスト等によって習熟の程度を把握し、指導に生かすことが効果的である。

「話すこと・聞くこと」の領域について

- ・話し手の意図や考えを的確に捉えながら聞く機会や、要旨や要点を捉えてメモを取りながら聞く経験を、授業等で意図的に設定することが重要である。

「書くこと」の領域について

- ・日記や感想を書くことを習慣化したり、短い文章で自分の考えや気持ちを表現する機会を日常的に設けることで、書くことへの親しみを育むことが大切である。また、書いた文章を互いに読み合い、考えを比較したり深めたりできるような話合いの場を設けることが重要である。

「読むこと」の領域について

- ・図書館の活用やブックトーク、新聞、詩集、親しみやすい古典など多様な文章に触れることで読書への関心を高め、粘り強く文章を読み進める力を育てることが重要である。また、読む目的を明確にして、要旨や登場人物の気持ちなどを的確に読み取る力を養うことが大切である。

その他

- ・話合い活動や交流活動では、活動後に自分の考えや学びを見直す時間を確保し、自己評価や相互評価の工夫を通して、育成を目指す資質・能力がどの程度身に付いたかを振り返らせることが大切である。
- ・既習の知識や習得した技能を活用し、必要な情報を整理して文章を書いたり、自分の考えを構成して発表したりする表現活動を意図的に設定することが重要である。
- ・自分の考えや学びを整理し、振り返ることができるようなノートを活用指導を行うことが大切である。
- ・ICTの活用においては、学習内容、児童の実態、学習課題、発達段階に応じて、その特性を生かした効果的な活用を図ることが必要である。

■小学校 社会科

○指導改善のポイント

「社会的な見方・考え方」の育成

- ・「社会的な見方・考え方」を働かせることを意識して思考ツールを活用していくことで「深い学び」に繋げていく必要がある。

資料の提示の仕方の工夫

- ・学習や既習事項の振り返りに役立つ資料の提示の仕方を地図や年表、グラフ、実物等を用いるとより効果的である。

小・中の学びの連続性

- ・小・中の学びの系統を意識し、歴史的・地理的・公民的な見方・考え方がどのように発展しているのかという視点を持って授業を行う必要がある。

児童へのはたらきかけ

- ・児童に学習過程をより意識させ、問題解決的な学習のよさを実感させる工夫が必要である。
- ・「まとめあげる」の場面では、自分の言葉でまとめる活動を充実させる必要がある。

ＩＣＴ機器の活用

- ・ＩＣＴを活用した資料提示等、効果的に用いて児童の学習活動に役立てるようにしたい。

■小学校 算数科

○指導改善のポイント

指導計画

- ・児童の単元等に関する情意面や既習内容の習熟度等を把握し、実態に合わせた指導計画を作成する必要がある。

「主体的に学習に取り組む態度」の育成

- ・児童が興味・関心をもって主体的に学習に取り組めるようにするため、授業において、日常の問題について具体物を操作し、児童が図や言葉、数、式、表、グラフなどを用いて解決する場面を意図的に設定すると効果的である。

ＩＣＴの活用

- ・デジタル教科書や教科書付属の動画コンテンツ等を活用するなど、児童が様々な方法で学習できるように、ＩＣＴ環境を整えていくことが必要である。

指導形態の工夫

- ・少人数指導等を活用したり、ペア学習、グループ学習などの学習形態を工夫したりして、個に応じた指導の充実を図ることで、全体の習熟度向上を図ることが大切である。

「思考力・判断力・表現力」の育成

- ・授業のねらいを明確にし、「自力解決」の時間を確保して自分の考えを持たせるとともに、話し合いにおいて目的や視点を明確にしたり、わかりやすい資料の作成について指導したり、発問や指示の工夫をしていくことが大切である。

振り返り

- ・学習内容や学習過程を振り返る場面において、学習問題に即して自分の言葉でまとめを書いたり自身の取組や気づきへの振り返りをしたりする時間を十分に確保するとともに、適用問題を利用した課題を与えるなどして、応用力を身につけさせることが大切である。

■小学校 理科

○指導改善のポイント

「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」の活用

- ・「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」のプロセスを生かした取組を定着させ、4年間を通した継続的な問題解決の力の育成に努める必要がある。

効果的な学習問題の設定

- ・授業において自然と親しむ中から生まれる発見や疑問を大切にした学習問題や、知的好奇心を刺激し、興味・関心や多様な考えを引き出せる学習問題を設定して展開することが大切である。

地域環境の教材化

- ・地域環境への関心を高め、学習内容を自分事としてとらえられるよう、意図的に自然に親しむ活動や体験的な活動を多く取り入れた学習、天候や自然災害と関連させた学習への積極的な取組が求められる。

指導と評価の一体化

- ・児童が見通しをもって学習するための学習問題を適切に設定するとともに、指導と評価の一体化を図ることが必要である。

ICTの活用

- ・ICTの活用が目的にならないよう留意し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の視点から、効果的な手立てを検討する必要がある。

学習形態の工夫

- ・個別、グループ、一斉などの学習形態を工夫し、視点をもった対話により深い学びにつながるよう工夫していく必要がある。

「主体的に学習に取り組む態度」の育成

- ・主体的に問題解決しようとする態度が養われるよう、児童自身の学習活動の振り返りを重視する必要がある。

■小学校 外国語科

○指導改善のポイント

目的意識

- ・児童が目的意識や意識をもち、「自分の考えや気持ちを伝え合う」ことができるように、児童個々の実態を的確に把握し、指導の充実を図る。

小・中の学びの連続性

- ・小・中の学びの連続性を踏まえた指導の充実や学習内容や学習状況を共有することが求められる。

ICT機器の活用

- ・言語活動の充実を図るために、デジタル教科書を含めたICTの活用場面を見極め、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて、1人1台端末を効果的に活用する必要がある。

「話すこと[発表]」の指導

- ・コミュニケーションの目的・場面・状況を意識した言語活動を設定することが重要である。

「書くこと」の指導

- ・小・中の学習指導の円滑な連携を目指し、十分に音声練習をした後で、書く活動を行うことが重要である。その際、児童の発達段階に応じて、学習活動を工夫する必要がある。

■中学校 国語科

○指導改善のポイント

年間指導計画等について

- ・学習の見通しをもてるよう、学習計画や教師のモデル的な言語活動の提示などを通して、学習過程を明確にし、生徒の主体的な学びを支える学習環境を工夫することが重要である。
- ・育成を目指す資質・能力を明確にし、生徒の実態や発達の段階を踏まえ、系統的・計画的な年間指導計画を作成することが求められる。また、小学校段階での学習内容を把握し、中学校各学年の学びの関連性を意識した指導が必要である。
- ・年間指導計画の中に、効果的な言語活動や多様な学習形態の工夫を位置づけることは、生徒の主体的な学びを促す上で有効である。生徒が学ぶ目的や意義を見いだし、自ら課題を設定し学ぶことの必然性を実感できるような学習の場を工夫することが大切である。

「言語」について

- ・教科書や読書活動を通じて、語句や文の意味や用法を文脈の中で理解できるようにするとともに、漢字の意味や使い方についても継続的に指導することが求められる。

「話すこと・聞くこと」について

- ・目的や場面に応じて意見を伝え合い、相手の意見を受け止めながら考えを深めるような話し合い・討論などの言語活動を通して、論理的に話す力や傾聴の態度を育てることが重要である。

「書くこと」について

- ・読み手の立場を意識し、考えが的確に伝わるよう文章を構成し推敲する力を育てることが重要である。授業では、自分の文章を読み返して表現を見直す活動を取り入れることが求められる。

「読むこと」について

- ・文章の内容を的確に捉え、他者に説明したり、他者の考えや根拠を理解した上で自分の考えを形成・深化させる活動を取り入れることが効果的である。また、他教科との関連を図り、教科等横断的な視点から取り組むことも重要である。

その他

- ・言語活動は育成を目指す資質・能力を育てるための手段であり、その目的を明確にした指導が必要である。ICT の活用も同様に、思考の整理や情報の共有、発表などに効果的に活用することで学習の質を高めることが求められる。

- ・学校司書との連携のもと、学校図書館の資料を計画的・継続的に活用し、生徒の主体的な学びや情報活用能力の育成を図ることが重要である。

■中学校 社会科

○指導改善のポイント

実態把握

- ・新たな単元に入る前に、その単元で身に付けるべき内容をどの程度身に付けているか確かめたり、事前に身に付けているべき知識及び技能の定着度を確かめたりすることが大切である。また、情意面の実態調査を行う場合は、学習内容に対する関心・意欲も含ませるようにする。
- ・学習計画を立てるときには、小学校社会科の内容との関連及び各分野相互の関連を図ることが大切である。

思考力・判断力・表現力の育成

- ・社会的な事象について、分類したり整理したりする活動時間の確保や、視点を明確にして話し合い、互いに学び、深め合う場の設定等、工夫していく必要がある。

「社会的な見方・考え方」

- ・「社会的な見方・考え方」を働かせながら「深い学び」につなげることを意識した授業改善が大切である。

ICT機器の活用

- ・協働学習において1人1台端末をさらに効果的に活用するとともに、ノートとの併用について、試行錯誤を重ねていく必要がある。

■中学校数学科

○指導改善のポイント

指導計画について

- ・新たな単元に入る前に、学習内容に関する情意面や既習内容の習熟度等を把握し、実態に合わせた指導計画を作成する必要がある。

「主体的に学習に取り組む態度」

- ・既習事項との違いや生徒の疑問点等から学習問題を設定することで、主体的に学習課題を追求しようとする態度を育成することが重要である。
- ・授業において、教師の説明時間を減らし、生徒自らが結果や方法の見通しを持ち、考え思考する時間や振り返りの時間を十分に確保する必要がある。
- ・『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』のプロセスを生かした授業展開を定着させ、生徒が主体的に学ぶ環境を構築する必要がある。

数学的な見方・考え方

- ・授業において、問題解決型の学習を取り入れ、多角的な視点から考える力を養うことや多様な表現方法を活用し、図やグラフを使って視覚的に考えさせるとともに、生徒同士の対話を通じて思考を深めることを通して、思考力、判断力、表現力を育成する必要がある。

- ・日常事象や数学の事象から問題を見だし、生徒が図や言葉、数、式、表、グラフなどを用いて解決する場面を設定し、数学的活動に取り組めるようにすることが大切である。

各領域について

- ・「数と式」については、数の性質について成り立つ事柄の特徴を、数学的に説明できるようにするために、文字を用いた計算結果を事象と関連付けて読み取る活動を充実させることが大切である。
- ・「図形」については、関数の視点から、図形の性質を考察する等、図形の性質を数量の関係に着目して捉え、その関係を数学的に表現する場を、授業の中で積極的に取り入れることが大切である。
- ・「関数」については、具体的な事象の中から伴って変わる二つの数量を取り出し、それらの関係を見出す活動を充実させることが大切である。
- ・「データの活用」については、数学科で身につけた技能を、社会科における、表やグラフ等の具体的なデータから資料の傾向を把握したり、比較したりする活動に活用する場面を意図的に設定するなど、教科等横断的な視点で指導計画を立てることも効果的である。

■中学校理科

○指導改善のポイント

『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』の活用

- ・『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』のプロセスを生かした取組を定着させ、3年間を通した継続的な問題解決の力の育成に努める必要がある。

主体的に取り組む態度

- ・主体的に取り組む態度を育成するためには、自然の事物・現象と関わる中で生じた疑問をもとに、身の回りの現象について演示実験を行ったり、既習事項を生かしたりする導入の工夫が必要である。また、生徒の知的好奇心を刺激し、興味・関心や多様な考え方に対応できるような学習問題の設定が求められる。

観察・実験

- ・予想や仮説を立てる場面や、観察、実験の結果から整理し、考察、説明する場面において、話し合い活動などの言語活動を充実させることは、科学的な見方・考え方を磨くことにつながる。
- ・観察、実験や自然体験、科学的な体験を基盤として、生徒が、主体的・協働的に問題解決を図っていくことができるような支援を充実させることが大切である。

I C T 機器の活用

- ・体験が難しい場合には、1人1台端末を活用して資料を提示する等、疑似体験的な活動を取り入れることも効果的である。

学びの系統性

- ・小学校や高等学校との系統性や理科を学ぶことの意義や有用性を実感できるよう留意することが必要である。

■中学校外国語科

○指導改善のポイント

C E F R A 1 レベルの達成

- ・既習の言語材料を選択・活用し、自分の考えや気持ちを伝え合ったり、コミュニケーションを継続したりして対話を深めながら、中学校卒業時の到達目標（C E F R の A 1 レベル）を達成していくことが求められる。

領域のバランス

- ・一連の単元や題材で「知識・技能」を習得する場面と「思考・判断・表現」する場面をバランスよく取り入れ、題材内容を広げ深める必要がある。

小中の学びの連続性

- ・小・中の学びの連続性を踏まえた指導の充実や学習内容や学習状況を共有することが求められる。

言語活動の充実

- ・デジタル教科書を含めた I C T の活用場面を見極め、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて、1 人 1 台端末を効果的に活用する必要がある。
- ・思考力・判断力・表現力を高めるには、複数の領域を統合した言語活動を行いながら自発的・主体的に思考し表現するような活動に取り組む必要がある。

学習形態の工夫

- ・グループワークやペアワークなど、学習形態を工夫し、生徒が自信をもって発話できる環境を整えることが重要である。

繰り返しの学習

- ・語彙や表現、文法等の知識については、繰り返しの学習により定着を図り、既習の言語材料を選択・活用しながら、学習を深めていくことが重要である。